昭和46年11月21日発行通巻37号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

11/21
220円

37

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第37号

カラーページ

監修　西脇昌治（東京大学教授）
翻訳　中村三郎（早稲田大学助教授）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
　和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
　和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

11月17日発売



世界動物百科
38号　11／28

カラーページ

私たちの仲間

荒原に生きる家族〈上〉

——あるキンイロジャッカルの一家——

H．グドール　抄訳　藤原英司

夕方が近づいていた。だが，太陽は空にあって，暑かった。

ゴロンゴロの噴火口平原には，一面に短い緑の草がはえ，そこを2頭のジャッカルが歩いていた。先に歩いていくのは，雄のジェイスンで，ときどき立ちどまっては，ふつうのイヌがやるのと同じように，あと足を片方あげて，草の茂みに自分のにおいをつけた。すると，すぐあとから雌のジューアルが，同じ所に，自分のにおいをつけていく。

この2頭は，これからこの土地で子どもをつくろうとしているのだ。いわば恋人どうしといったところで，今，いっしょに自分たちのなわ張りに，しるしをつけてまわっているのだった。

やがて急に雄のジェイスンが，からだをかたくして立ちどまった。首と背中の毛をさか立て，しっぽをぴんと立てている。雌のジューアルもジェイスンのそばに立ちどまって，前方にじっと目を注いだ。行く手に第3のジャッカルがからだを丸めてうずくまっている。どうやら眠っているようだ。

ジェイスンはくちびるをめくりあげ，うなりながら進みでていった。耳を伏せて頭を下げ，背中を弓のように曲げている。ジェイスンは口を大きくあけてきばをむきだし，侵入者につめよった。相手のジャッカルは目をさましたのか，地面に這いつくばったような格好をしているようだった。

ところが，次の瞬間，たちまち格闘が始まった。戦いの勢いはものすごく，なにがなんだか，こまかいことはわからなかった。とにかく第3のジャッカルが逃げようとして，その首にジェイスンがとびついていったことはわかった。相手のジャッカルは振り向いて応戦し，2頭はあと足で立ちあがったまま，つかみあいをするような格好で，相手の顔や首に嚙みつきあっていた。

しかし，そのうちに第3のジャッカルがジェイスンの攻撃からのがれて，いちもくさんに逃げだした。ジェイスンとジューアルは，いっしょにあとを追跡した。だが，それもしばらくだった。侵入者がジェイスンたちの領地からずっと離れると，2頭は追うのをやめて立ちどまり，相手が逃げ去っていくのを見つめていた。

やがてジューアルは，あと足で立ちあがって，両方の前足をジェイスンの肩にかけた。そしてジェイスンの片方の耳のまわりをなめまわし，さかんに毛づくろいを始めた。ジェイスンはおとなしくされるままになっていたが，やがて腰をおろし，次いでからだを横たえ，ほとんど目を閉じた。雌のジューアルはさかんにジェイスンの金灰色の毛皮をなめつづけた。

こうしてジューアルは，25分間も相手のからだをあちこちなめまわした。それから今度はジェイスンが5分ほどジューアルのからだをなめ，やがて少し離れた所へいってからだを丸めた。するとジューアルは，相手のほうをちらっと見てから，自分もからだを丸めた。

赤ん坊をねらうハイエナ

2か月たったころ，ジェイスンとジューアルの夫婦に，かわいい赤ん坊が4匹生まれた。赤ん坊は地面に掘った穴の奥で生まれ，ジューアルはよく穴の外で巣の番をしていた。

ある日，ジューアルが穴の入り口から少し離れたところで眠っていると，ハイエナが1頭やってきた。ハイエナはときどき鼻づらをもちあげ，空気のにおいをかぎながら，ゆっくり近づいてきた。やがてジャッカルの巣の入り口のところへくると，ハイエナは穴の中へ頭を突っこんだ。中にいる4匹の子を，掘りだして食べようというのだろうか？

そのとき，いきなりハイエナがすごい叫びをあげてとびあがった。ジューアルが，後ろからハイエナのお尻に嚙みついたのだ。しかし，ハイエナが振り向くと同時に，すばやくとび離れ，空へ鼻を突きあげて，かん高いほえ声をあげた。それは夫に助けを求める叫びだったようだ。

ハイエナは目の前のジューアルに気をとられていて，雄のジャッカルが駆けつけてきたのに気づかなかった。ジェイスンはまっすぐ現場にとびこんでくると，ハイエナのあと足に嚙みついた。ハイエナはまたとびあがって，向きを変えた。つまり，ジューアルのほうへお尻を向けたのだ。すると，すかさずジューアルが，ハイエナのあと足に嚙みついた。ハイエナは，またとびあがって振り向いた。

こうして2頭のジャッカルは，かわるがわるハイエナのあと足をねらい，ついにハイエナは，しゃがみこむようにしてあと足を守りながら，ぶざまな格好で，その場から逃げだしていった。

その後もジェイスンとジューアルは，たびたびハイエナを巣のそばから追いはらった。ハイエナが実際にジャッカルの子を食べているところは，まだ一度も見たことがない。だが，ハイエナがジャッカルの子を追いまわす場面は，何回か見た。だから，もし食物が極度に不足して



ハイエナと肉の奪い合いをする父親のジェイスン（左）　大型獣の食物の残りを，ふだんは平和共存で分け合うが，たまには命をかけて争わねばならない　余分の肉を得たときは，あちこちにたくわえておく



ハゲコウから食物を守るセグロジャッカル　（セグロジャッカルは、大きさ、生態ともキンイロジャッカルとほとんど同じで、背と尾の先に黒い毛がはえており、アフリカだけにすむ）

くると、ハイエナはジャッカルの子を穴から掘りだしてでも食べるのではないかという気がする

冒険心の強いルーファス

4匹の子どもには、それぞれ、アンバ、シンダ、ルーファス、ナゲットという名まえをつけた。4匹のうちでいちばん小さいのはシンダだった。シンダは雌だったが、からだが小さいばかりでなく、性質もいちばん臆病だった。鳥が飛び過ぎるとか、雲がちょっと日をおおって影が流れても、シンダはたちまち巣穴へとびこんだ。突然雷が鳴ったときなど、頭からまっさかさまに穴へころげこんだ。遊ぶときも、いちばんおとなしく、みんなが遊びに熱中して荒っぽくなりだすと、仲間から離れて横になり、ほかの子たちが元気よく走りまわるのをながめていた。それでもときどき、強い子どもがいきなりシンダにとびついたり、突きころがしたりすることがあった。

ルーファスは雄の子だが、これはシンダとは対照的な性格だった。4匹の子のうちで、もっとも冒険心が強く、最初に巣穴から2,3メートル離れたところへ出ていったのは、この子だった。あるときエジプトガンが6羽、ジャッカル親子の巣穴のそばを歩いて通ったことがあった。すると、ルーファスは、自分より4倍もあるガンの群れのほうへ忍んでいった。ルーファスが近づいていくと、ガンの群れは歩くスピードをあげた。ジャッカルが近づいてくるので逃げるわけだが、相手がそんなに小さくては、わざわざ飛びあがる気にもなれないというところらしい

こうしたルーファスの冒険好きは、一面、好奇心の強さからくるものでもあった。巣穴のまわりにはえている植物が花を開くと、ルーファスは出かけていって、さっそくにおいをかいでみた。また鳥が羽を1枚落とすと、いつもルーファスがまっ先に気づいて、ようすを見にいくといったぐあいだった。

ジャッカルの子は、一般の哺乳動物の子と同じように、ほかの子がやることをまねする。ルーファスはそういう場合、いつもまっ先になにか新しいことをやった。たとえば、虫を見つけて、はじめてとびついたのもルーファスだし、巣穴から5メートルほど離れたところに落ちている、湯げの立つサイのふんにじゃれついたのもルーファスだった。ルーファスがそういうことをすると、必ずほかの子がそれをまねた

甘ったれのアンバ

アンバという雌の子は、4匹のうちで、いちばんの甘ったれだった。ジャッカルの母親は、みんな子どもをよくなめるが、アンバの母親ジューアルほど、子どもをなめるのが好きなジャッカルは見たことがなかった。からだをなめて毛づくろいをすることは、動物のあいだでは、大きな社会的意味をもっている。グループどうしのきずなを強め、夫婦間の愛情を固め、親子のつながりを強化する。そのほかにも、むろん毛皮をきれいにしておくという意味ももっている。ジューアルとジェイスンは、おたがいに長い間会わないでいたときなど、再会すると、必ずおたがいの口や耳をなめあった。いずれにせよジューアルは、夫のことも子どものことも、なめるのが好きだった。アンバはその性質を受けついだのか、たちまち母親と同じように、なめるのが好きになった。そして兄弟たちを次次つかまえては、やたらになめまわした。だが、ほかの子は、なめられるより遊ぶほうがいいので、アンバはいつも兄弟に逃げられた。しかし、母親がほかの子をなめていると、アンバはよくそばへいって、母親といっしょにその子をなめまわした。

一方、アンバは自分がなめてもらうことも好きだった。だから母親がほかの子をなめていると、その間へ割りこんで、自分がなめてもらうこともあった。そんなとき、今まで母親につかまってなめられていた子は、遊びにいきたくてたまらなかったところだから、大喜びで逃げだしていくのだった。ときどきアンバは、両親がおたがいになめあっているところへ割りこむことがあった。そういうときは、父親か母親のどちらかが、いやでもアンバをなめさせられるはめになった。

遊び好きのナゲット

ナゲットという子は雄だった。この子は4匹のうちで、遊ぶことがいちばん好きだった。いつも小さな頭を振り動かすようにしながら、ほかの子のそばへ近づいていく。これは〝遊ぼうよ〟という誘いのしぐさなのだ。もし、ほかの子が遊び疲れて相手になってくれないと、ナゲットはひとりで遊んだ。そんなときナゲットは、草を仲間のしっぽでも引っぱるように、くわえてぐいぐい引き、やがて引きちぎって、あおむけにひっくりかえったりした。また、小石とかシマウマのかわいたふんなどを口でくわえて空へほうりあげ、それが地面に落ちたところでとびかかっていった。ある日、毛と皮のかたまりを見つけ、それをほうりあげたり、とびついたりして、1時間もひとりで遊んでいたことがあった。このおもちゃはよほど気にいったらしく、その後もナゲットは、たびたびそれを相手にひとりで遊んだ。あるときなど、ナゲットはチョウチョウに向かって、頭を振り動かし、遊ぼうよと誘いかけていることがあった

遊び方は、子どもたちが成長するにしたがって変化した。幼いころには、おたがいにそっと噛んだり、組み合ってころげたりして遊んだ。だが、大きくなるにつれて、同じことをやる場合でも、激しさが増した。2匹が正面から向かいあって両方の前足を相手の肩にかけ、口で噛みあう遊びも、よく見られるようになった。立ちあがって噛みあう2匹はからだのバランスを失って倒れるが、倒れてからも地面をころげまわりながら、噛みあう。そしてネコのように、両方のあと足で相手を蹴りつけるのだった。

ある日、ナゲットがダチョウの羽を1本見つけた。ナゲットは用心しながらそのにおいをかいでいたが、やがて、勢いよく羽にとびかかった。しかし、羽をくわえてはみたものの、まるでスリッパをくわえた子イヌのように、とまどってしまった。するとそこへルーファスがきて、羽をとろうとした。ナゲットはあわてて羽をくわえてとんで逃げ、あとからルーファスと他の2匹が追いかけていった。やがて、ナゲットは羽をつかまれて引きあいが始まり、最後には、とうとう羽はぼろぼろになってしまった。

拾い食いと、狩りと

1月にはいって雨期が始まると、平原にはいっせいに緑の新芽が吹きだし、草食獣の食糧が豊富になった。そのころ、平原で草を食べているヌーの群れには、子を宿しているものが多かった。

ある日、狩りに出たジェイスンは、なかなか大胆なことをやった。母親のそばに身を横たえていたヌーの、生まれたばかりの子の足に噛みついたのだ。ヌーの母親は、すごい勢いではね起き、つのを振りかざしてジェイスンに襲いかかった。ジェイスンはあわてて、とんで逃げた。ヌーの子は生まれたての赤ん坊でも、ジェイスンの3倍はある。しかも母親のすぐそばに寝ていたのに、その足を引っぱるのだから、ずいぶんあつかましい話だ。

2日後に、この奇妙なできごとを説明するような事件が起こった。

その日ジェイスンとジューアルは、いっしょに狩りに出かけた。この2頭がそろって狩りに出るのは、4匹の子が生まれて以来、はじめてのことだった。キンイロジャッカルは、1頭だけで狩りに出ることが多い。

2頭はヌーの群れのあいだを、とことこ駆けぬけていった。そのうちに、突然、ジェイスンが立ちどまって、空気のにおいをかいだ。それからジューアルといっしょに、子どもを連れた母親のヌーのほうへ進みだした。その進み方は、いかにも目的ありげだ。

2頭が近づいていくと、ヌーの母親は頭を下げ、2頭につのを向けて威嚇した。ジェイスンとジューアルは逃げたが、ちょっと身を引いただけで、すぐにまたもどってきた。そしてヌーの親子のまわりをうろうろしはじめた。30分たっても、2頭はやはりヌーのそばを離れようとしない。

やがて急に、ヌーの母親が、そわそわとおちつきがなくなった。それから地面にしゃがみこむと、後産をした。つまり、子どもを生んだあとの胎盤などを排出したのだ。これで、そのとき、はじめてわたしは、そのヌーの子が生後2,3時

間しかたっていないことを知ったのだった。ヌーの子はからだがかわいていて、とても生後数時間とは思えなかった。だが、ジェイスンとジューアルは、おそらくにおいから、胎盤がまだその母親の体内にあることを知って、あとをつけまわしていたに違いない。その忍耐が、ついに報いられ、ジェイスンたちは、ヌーの胎盤にありついたのだった。

このことから、ジェイスンが2日前に、生まれたてのヌーの子の足をくわえた説明がつきそうだった。つまり、ジェイスンはヌーの子のにおいをかいで、胎盤のかたまりとまちがえたのではないかという推測である。

そのあと2週間は、ヌーのお産の時期で、次々と子が生まれた。同時に胎盤の排出もあいつぎ、ジャッカルたちは豊富なえさに恵まれた。

ジェイスンとジューアルは巣穴のそばに寝そべっていて、突然，はっとしたように空を見上げることがあった。そういうとき、空を仰ぐと、ハゲタカの小さな姿が空に舞っているのが見えた。やがてハゲタカは低空へ舞いおり，姿が大きくなってくる。そして，どの方向を目ざしておりようとしているかということがわかると、ジェイスンたちは勢いよくとびだしていく。ハゲタカが舞いおりるところへ、いちもくさんに走っていくが，現場へ着いたときには，もうハゲタカが胎盤を平らげてしまった直後ということがよくあった。

ジャッカルは，ふだん拾い食いをしたり，残り物ばかりを食べるように思われているが,実際には,自分で狩りをするほうが多い。獲物はネズミやトビウサギのような小型の動物で，茂みのそばにじっと立っていたかと思うと,突然,はじかれたようにとびあがって獲物を押える。

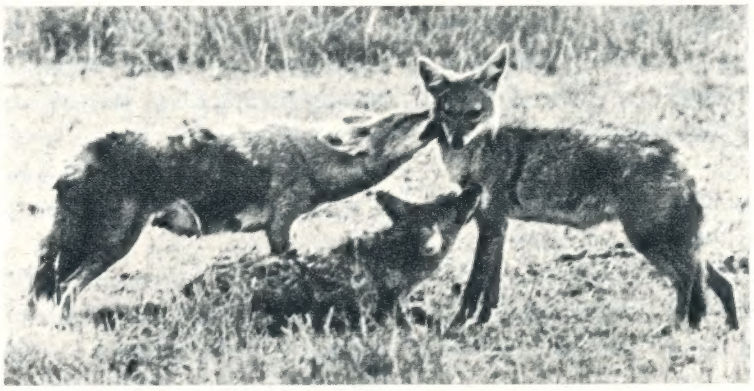
だが，ヌーがお産をする時期には，ジャッカルは自分で狩りをするより，拾い食いのほうが多くなる。また，大型の猛獣が近くで獲物を倒したときには，ごちそうのおこぼれをもらいにいく。それもかなり大胆で，一度など，ライオンのひじの下から肉をひとかけ奪いとったのを見たし，ハイエナと肉をとりあって，力まかせに引っぱりあいをすることもあった。獲物にたかっているハゲタカなどにも，平気でとびかかっていって追い散らすなど，恐怖心がまるでないのかと思うようなこともやった。

そのほか，バッタやコオロギなどの昆虫(こんちゅう)も食べるし，土を掘って幼虫を食べたり，空中にとびあがってガやカブトムシを捕えるなど，ジャッカルの食性の範囲はかなり広い。■

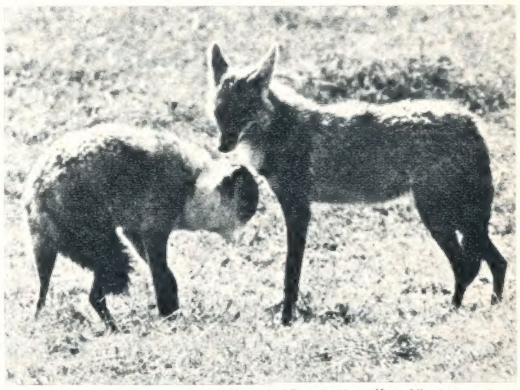
子どもたちは遊び好き



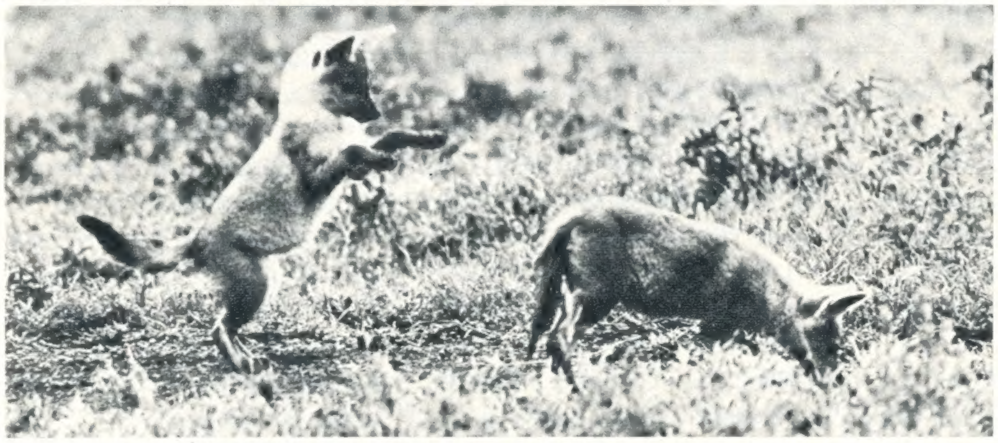
シンダは子どもたちのなかではいちばん小さく，臆病で，雲や小鳥の影，ちょっとした物音にもおびえて巣穴へ逃げこんだ
兄弟とのとっくみあいでも，すぐ降参してしまい，かたわらからながめていることが多かった



アンバの毛をなめてやるジェイスンとジューアル
ジャッカルは夫婦のあいだでも，親子のあいだでも，おたがいのきずなを深めるためによく〝毛づくろい〟しあう
なかでもジューアルは，暇さえあれば夫や子どもたちの毛をなめていた



ナゲットは，若い雄ジャッカルとしてみごとに成長してからも母親にはいつまでも従順だった



昆虫を追いかけるルーファスにとびかかろうとしているナゲットは，遊び好きで，いつも相手を捜していた
小さな頭を〝遊ぼうよ〟というように振りながら仲間に近づくが，相手にされないと，かれらのシッポのかわりに草の茎を引っぱったり，小石をくわえてほうりなげ，落ちてくるところをとびかかったりして遊んだ
あるときなどは，飛んでいくチョウチョウにさえ，小さな頭を振ってみせていた



〝綱引き〟は子どもたちのお気に入りのゲーム
ある日ナゲットの見つけたダチョウの羽に，ルーファスがとびついて引っぱり合いになった



ルーファスは，もっとも冒険心と好奇心に富む
子どもたちはおたがいのまねをよくするが，いつもかれがお手本になった　きょうも，ヌーのつのをくわえたかれを，ナゲットとアンバが追いかけている

もうひとつの世界

24

グループ・5プラスＩ

動きのにぶい動物の大移動



カニのメガロパ期幼生

大海原のなかで舟をとめて釣りを楽しんでいるようなときに、しばしばあちこちの水面に、小さな波紋が生じることに気づく。しかもさらにその波紋は，ゆっくりではあるが，静かに音もなく舟のほうに集まり寄ってくることも見いだすに違いない。しかし依然として，その波紋の主は姿をあらわさない。

広々とした海原に漂っている小舟，そこに集まってくる正体不明の無数の小さな波紋というとミステリーめくが，その波紋の生じているところの水を，有り合わせのバケツなどでくみとって，よくその水のなかを観察してみると，波紋の主がガラスのように透き通ったからだで，目玉の大きな，カニともエビとも判断のしかねる小動物であることを発見するであろう。

相模湾に例をとってみると，この姿なき波紋の主人公は，夏冬をとわず，ほぼ1年じゅう出現しており，小は甲長2ミリから，大は9ミリに達する。これをつかまえてきて水槽の中で飼ってみると，次々に小さなカニに変態することから，カニの形になる以前の「幼生」であることがわかる。

カニの仲間は，カニの形になるまでに，3つのまるで違った形になる。最初のノープリウス期幼生といわれるものは，母ガニの腹部についている卵のなかで過ごす。からだに4本の大きなとげをもち，目の大きなゾエア期幼生になると，ふだん陸地にすんでいるアカテガニやベンケイガニ，あるいは淡水にすんでいるモクズガニなど，サワガニ科を除くすべてのカニは，その幼生を海中に放すのである。

海のなかを漂い流れて，次のメガロパ期幼生になると，かなりカニの形に似て胸脚も5対そろう。エビのからだのようにのびている腹部には，5対の付属肢があって，泳ぐのにつごうがよくなっている。

ガザミの幼生を例にとってみると，からだの大きさ2ミリのゾエア期幼生は，10日間で3回脱皮してメガロパ期幼生となり，その後1週間ほどで脱皮してカニの形となる。

岩はだに固着しているフジツボやカメノテ，砂泥地にもぐっているアサリ，ゴカイ，岩陰にひそんでいるウニ，ヒトデなど，海のなかには移動する能力に乏しい動物をたくさん見つけることができる。

これらの動物たちは，その地域が豪雨によって海水が淡水のようになったり，水温が著しく低下してしまったり，というような異変が生じた場合とか，逆に最適環境となって大繁殖をしたために，酸素不足，飢餓状態におちいったような場合にはいずれも全滅のおそれが生ずる。

しかし，これらの移動力をもたないか，またはもっていてもはなはだ弱い動物たちの生活史を調べてみると，これらの動物たちも，その生涯の一時期において大移動をしていることがわかる。

すなわち，これらの動物たちも，カニの場合と同じように成体になる以前に，海流にのって浮遊生活をして各地に運ばれているのである。

生殖期になると陸地から海べあるいは海中へ移動するのは，カニの仲間だけではない。ふだんは陸地にちらばってすんでいるヤシガニは，ヤドカリの仲間にもかかわらず，申し合わせたように潮のしぶきに洗われている岩壁に出かけて，腹に抱いているゾエア期幼生を海へ放す。

ゴカイの仲間のイソメも，生殖期になると川からいっせいに海へ泳ぎだし，やがて卵からかえった幼生は浮遊生活にはいる。

母親たちが，どのような合図で海へ集まるのかはともかくとして，無防備の幼生が海を浮遊するよりも，成体になったものが移動したほうが，魚たちに食べられなくてすむように思えるのであるが，それならば，なぜ幼生のときに移動するのであろうか。

その理由として考えられるのは，まず1か所に幼生たちがとどまった場合の，溶存酸素やえさの欠乏を避けるという消極的な理由のほかに，幼生でなければならないという理由をあげることができる。それはからだが小さいということにほかならない。小形であるほどからだの重さにくらべて体表面積が大きいから，体表面積が相対的に小さくなる大形（成体）のものより幼生は沈みにくい。

そのうえ各種の浮遊している幼生をみると，からだにとげがあったり突出部があったりするものが多い。これは簡単な形のものよりも体表面積が大きく，必然的に摩擦が大きくなって，さらに沈みにくくなっているのである。

次にその移動する距離であるが，幼生時代であれば長時間にわたって浮遊することができ，潮流によって遠くにまで運ばれ分布するチャンスに恵まれている。ガザミの幼生についてみると，浮遊生活をしている期間は前述のとおり17日ほどであるが，この期間にもし毎時1～3ノットの黒潮にのったとすると，755～2265キロの距離を移動したことになり，九州ないし台湾海域のガザミの幼生が，東京近くの海に到達するということになるのである。

また幼生は軽いために表層を浮遊できるということは，深海では生存できない浅海性の動物にとっては，浅いところにたどりつくのに便利である。

日光の豊富な表層は，幼生たちのえさとなる植物プランクトンも多く，溶存酸素の量も豊富で，その生活環境は決して悪くない。このようにしてカニに限らず動きのにぶい動物たちは，親と似つかぬ形の幼生時代に，いちはやく広い範囲にわたっての分散をなしとげる。

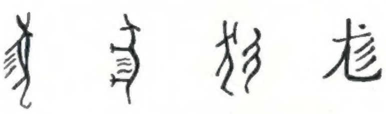
横這いするカニとなっては，広い範囲に大きな移動をすることなどはできないが，そのふるさとは案外に遠いところかもしれないことを，メガロパ幼生は物語っているのである。■　（H）



カニのメガロパ期幼生

漢字のふるさと　28

藤堂明保



尨（むくいぬ）　漢音ではボウ，呉音ならモウと読む。

この字は，「犬」＋「彡」（たくさんの毛）からなり，もじゃもじゃとした毛が垂れさがった，大柄なイヌを表わしている。蒙蔽（もやもやとおおう）や蒙蒙（もやもや）という場合の「蒙」と同系のことばである。古くは『詩経』の中に，「野に死せる鹿あれど，尨をして吠えしむるなかれ」と詠われており，毛深い野犬を意味している。もやもやと毛がはえていると，ひと回り大きく見える。だから尨大といえば，さかいめがはっきりせず，むやみに大きいという意味である。

今の北京語では，野犬のことを「野狗」といい，黄や茶の長い毛をはやしたのを特に「黄狗」という。革命前のことだが，中国では「黒狗はまずいが，黄狗はうまい」といって，時どき野犬の「黄狗」の肉を食べさせられた。あっさりして柔らかく，馬肉よりはずっとうまい。それも手伝ってか，中国では日本ほど野犬が多くなかった。古代の「尨」ということばは，今は消えうせたが，この「野狗」がまず「尨」の跡継ぎにあたることばであろう。

今日では，「糞をまきちらして衛生上よろしくない」というので，中国の都市ではイヌを飼わない。数年前，北京の西園寺公一氏の家でそっとイヌを飼ってみたところ，近所の子どもたちが珍しがってのぞきにきたそうである。■



鰭脚亜目　*Pinnipedia*

アザラシやアシカが，イヌやネコに近い仲間だということは，信じがたいことかもしれない。しかしこれらの動物はともに，食肉目に分類されている。

哺乳（ほにゅう）類食肉目は，２つの亜目に分けられる。裂脚（れっきゃく）亜目はイヌ，ネコなど，地上で生活する肉食動物である。鰭脚（ききゃく）亜目は，水中生活をするため，四肢（しし）がひれ（鰭）に変形した肉食動物で，アザラシ科，セイウチ科，アシカ科の３科が含まれる。

同じく水中生活をする哺乳類に，クジラ類があるが，クジラ類がまったくの水生であるのに対して，鰭脚類は一定期間を陸上で過ごすので，歩いて，あるいははって，地上を移動することができる。

鰭脚類は，陸生の食肉目動物より水中生活に適したからだつきをしている。泳ぐときの水の抵抗を少なくするために，頭と胴体は紡錘形になっているし，からだの表面からの出っ張りは，ほとんど消えてしまった。

耳介（じかい）は退化しているか，またはすっかりなくなっている。また耳の穴は意のままに閉じることができ，水にもぐっている間，鼓膜（こまく）を水圧から守る。鼻孔も水がはいらないようにふだんは閉じていて，筋肉を強く働かせないと，鼻孔を開いて呼吸することができない。アザラシ科の雄では，睾丸（こうがん）も体内にあって，水の抵抗を少なくすると同時に冷えすぎを防いでいる。

四肢はすべてひれに変形しているので，これを使って泳いだり，ブレーキをかけたりする。四肢は短いが，指の骨は長く，指と指の間には膜が発達していて，いわゆる水かきが



ウェッデルアザラシ　*Leptonychotes weddelli*。
アザラシ科。
鰭脚亜目は，水中生活に適するように
からだが変形した，食肉目の仲間である。
顔つきは，どことなくイヌに似ている。（上）
PH. F. ERIZE

タイヘイヨウモンクアザラシ。
鰭脚類の四肢はすべてひれに変形して
指の間には水かきが発達している。
紡錘形のからだつきは水の抵抗を少なくし
耳と鼻の穴も，水中では閉じている。（下）
PH. E. P. S.

できている。

皮膚は厚く，ほとんど例外なく毛でおおわれている。その毛は長くのびてたてがみ状になることもあり，またほとんどの種では，濃い綿毛と粗毛とが重なってはえている。

潜水に適したからだの構造

鰭脚（ききゃく）類が，氷のように冷たい水にいつまでもつかっていたり，長時間水にもぐっていられるのは，なぜだろうか。それを説明するには，からだの内部構造の特徴について述べなければならない。

厚さ数センチから10センチにも達する，皮下脂肪の層は，鰭脚類にとって二重の利点となっている。つまり，比重が小さくなり，からだが浮きやすくなると同時に，寒さから身を守る役割も果たしているのである。しかし皮下脂肪だけでは，寒さを防ぐにはじゅうぶんではない。なにしろ体温が38度ある動物が，ときには０度の海中で長い間暮らすこともあるのだから。

そんなとき，からだを寒さから守るのは，血液の循環である。鰭脚類では，毛細動脈と毛細静脈とがぴったり接触して流れている。からだの外側の，０度に近いところを通って冷却された静脈血は，からだの中心部にもどってくる間に，薄い膜だけを境にとなりあっている動脈血の熱によって，あたためられる。逆に動脈血は，からだの外側にいくまでに冷やされる。このようにして，カロリーの消耗を最低限におさえ，同時にからだの中心部では，体温を保つことができるのである。

また長時間水にもぐっているための，からだの適応性も，非常に合理的なものである。鰭脚類は潜水の達人で，20分くらいまではもぐったままで，呼吸せずにいることができるし，数十メートルも深くもぐることができる。確かに肺はよく発達しているが，潜水時間が長いのは，たんに肺活量が大きいからというだけではない。

水にもぐり始めると，すぐに心臓の搏動が，著しくおそくなる。血液循環はゆるやかになり，体内での酸素の消費量も少なくなる。すると反射神経が，四肢（しし）や皮膚や内臓に血液を運ぶ血管を，細くしてしまう。ただ心臓と脳だけは，重要な器官なので，いつもと同じ量の血液が送られている。

水にもぐっている間，血液の供給が少なくなった器官は，血液によって運ばれる酸素が不足するので，大量の乳酸が体内でつくられる〔注１〕。この乳酸は，筋肉組織のなかに蓄積される。呼吸をしに水面に浮きあがってくると，すぐに全身の血液循環が回復され，乳酸は分解して血液のなかに溶けていく。この乳酸がすっかりなくなってしまうまで，しばらくの間，たっぷりと呼吸をする必要がある。

歯列は完全だが，かなり変形している。門歯は一般に小さい。犬歯はよく発達していて，セイウチの上あごでは大きくて長いきばになっている。臼歯（きゅうし）はかなり変形し，とがっている。〔注２〕

大脳はよく発達している。食肉目でも陸上生活をする裂脚（れっきゃく）亜目では腸が短いが，鰭脚亜目では腸は非常に長い。

日光浴が大好き

鰭脚（ききゃく）類の分布海域は広く，すべての海洋にわたっていて，かつて海につながっていた一部の湖にも生息している。しかしとくに好むのは冷たい海域で，もっとも多く生息しているのは，南極海と北極海，およびその周辺である。というのは，冷たい海のほうが魚類，軟体類，甲殻（こうかく）類などのえさが，豊富に求められるからである。モンクアザラシだけは例外で，温熱帯地方の海にいる。

アザラシ科は，北極海，南極海，太平洋，大西洋，地中海のほか，カスピ海などの鹹水湖にも生息している。アシカ科は，南極海と北太平洋にいる。セイウチ科は，北極海にしかいない。鰭脚類はふつう海岸の近くで生活している。

鰭脚類は，大なり小なり回游する。その規模は，何をえさにするかによって異なるが，繁殖期には必ず海岸で過ごす必要がある。また繁殖をする場所は，毎年ほとんど同じところである。





ウェッデルアザラシ。
鰭脚類は陸上を歩くのは得意ではないが
厚い脂肪層と合理的な血液循環のおかげで
氷の上に長い間いても平気である。

PIC F. ERIZE



陸上での行動は無器用である。岩や流氷の上にはいあがって、長い間寝そべっている姿をよく見かけるが、危険を感じると、急いで水にとびこむ。アシカ科ではかなり早く歩くことができるが、セイウチ科では歩くのは得意ではない。

アザラシ科では四肢（しし）は歩くのには役にたたず、毛虫のようにからだをくねらせて移動する。うつ伏せに寝た姿勢から、からだを弓なりに曲げ、後半身をささえにして、前半身を前に押しだすようにしながら、からだをのばす。これを繰り返して進むのである。四肢は泳ぐとき以外には、岩によじ登るときや、からだをかいたり、毛並みを整えたり、子どもを抱いて水にとびこむときに、用いるだけである。

しかし、水中では実に楽々と行動する。クジラのように背びれや尾こそ発達していない

キタゾウアザラシ。
鰭脚類は、一般に繁殖期になると
毎年同じ海岸に、群れをなして集まってくる。
ここで出産し、交尾し、子どもを養育する。（上）
PH. S. GILLSATER



ウェッデルアザラシ。
南極大陸の沿岸には、
この種をはじめ、多くのアザラシがいる。
南極探検家や、そり引きイヌにとって
アザラシの肉は重要な食糧となった。（下）
PH. F. ERIZE

が，四肢を使って自由自在に動きまわる。背泳ぎでも平泳ぎでもうまいもので，立ち泳ぎの姿勢で後ろに移動することもできる。

鰭脚（ききゃく）類は，夜も昼も活動する。一晩じゅう，えさを捜しまわっていることもある。しかしあまり活動的ではなく，ひなたで長時間，うつらうつらしていることがある。交尾期には，雄は何週間も絶食を続け，げっそりやせるが，ほどなくもとどおりに，まるまると太ってしまう。

この動物は年をとると，ひどくなまけ者になる。しかし鰭脚類は，陸上を動きまわるようすがいかにも無器用なので，実際よりものらくら者にみえるということに，注意しなければならない。

危険を感じると，向かっていくよりは，むしろなんとか逃げようとするが，雌や子どもたちを守るためには，勇敢に戦う。自然界での敵は，ホッキョクグマ，シャチなどだが，毛皮目あての人間もまた，恐ろしい敵である。人間のめったにいかない場所に生息しているものは，人間をこわがらないが，他の地方では，動物たちのほうでも経験を積んで，非常に用心深くなっている。

繁殖地には大群が密集

ほとんどの鰭脚（ききゃく）類は，集団で生活している。少なくとも繁殖期にはそうである。オットセイやタテゴトアザラシは，きわめて大きな集団をつくり，ときには海岸ぞいに50キロ以上もの距離にわたって，群れをつくっていることがある。

アシカ科では，繁殖期には大きなハーレムを形成する。もともとハーレムとは，一夫多妻のイスラム社会で，婦人の居室をいうことばだが，アシカ科も1頭の雄が数十頭の雌を独占するので，ハーレムということばを流用している。

しかし，アザラシ科では，ほとんどの種類が，ハーレムらしいものはつくらず，種によっては，一夫一婦制の傾向さえ認められる。セイウチ科は一夫多妻だが，ハーレムはつくらない。

妊娠（にんしん）期間は長く，種によって異なるが，8～12か月に及ぶ。こんなに長いのは，受精卵が子宮壁に着床するまでに，時間がかかるためである。繁殖期には，出産後ただちに交尾が行なわれるが，これは双角子宮をもつためである。つまり，子宮が左右に1つずつあって，交互に働く。一方が産後で回復していないときでも，もう一方が役目を果たすことができるのである。

生まれたばかりの子どもは，すでに生理的によく発達していて，上質の毛でおおわれている。この毛は成獣のものとは異なり，羊毛状で密生していて，毛皮製品の原料として高く評価されている。授乳期間は一般に非常に短く，また授乳の間隔が長い。

成長は早くて，2～6歳で成獣となる。寿命は25～40年である。

鰭脚類は肉食性で，魚類，頭足類〔イカ，タコなど〕，甲殻（こうかく）類〔エビ，カニ，オキアミなど〕を好む。これらのえさが見つからないときには，海藻類を食べて飢えをしのぐことがある。ヒョウアザラシは，鳥類や他のアザラシの子どもを襲って食べる。

19世紀以来，脂肪や毛皮を利用するための乱獲が行なわれ，老幼，雌雄の別なく殺されたので，鰭脚類の生息数は著しく減少した。近年になっていくつかの種に対しては保護政策がとられ，国際的な協定によって完全に管理されているものもある。

いままでに述べたことを整理すると，要するに鰭脚類は，次のような特徴をもっている。

- 水中生活によく適応している。
- からだつきは紡錘形で，四肢（しし）はひれ状に変形し，指の間には水かきがある。
- 頭骨は，裂脚（れっきゃく）類〔陸上生活をする食肉目〕よりも，さらに扁平である。
- 鎖骨（さこつ）がない。
- 尾は退化して，短くなっている。
- 生まれたばかりの子どもは，生理的によく発達している。
- アザラシ科，セイウチ科，アシカ科の3科に分かれ，約30種がある。





ウェッデルアザラシの母と子。
鰭脚類は1産1子で，きわめてまれに2子を生むことがある。生まれたばかりの子どもは綿毛が密生しているが，数週間で換毛する。（上下）
PH. J. MASSON–EXPED. POLAIRES FRANÇAISES





タテゴトアザラシ
鰭脚類は，おもに冷たい海に多く分布している
魚，イカ，タコ，オキアミなど
えさにする動物は冷たい海に多いからだ。（上）
PH. VARONS

ゾウアザラシの母と子。
アザラシの，子どもに対する愛情は深い
外敵から守り，よくいっしょに遊んでやり
危険が迫ると前肢で胸に抱いて海にとびこむ。（下）
PH. F. ERIZE



アザラシ科　*Phocidae*

アザラシ科は，鰭脚（ききゃく）亜目ではもっとも種類が多く，13属19種がある。

からだは紡錘形で，耳介（じかい）がなく，口蓋（こうがい）は短い。四肢（しし）の指は，外側にいくほど長く，水かきがあり，つめがついている。後肢（こうし）は前方に曲げることができず，地上を移動するのには役にたたない。

毛並みは，ほとんど粗毛だが，種によってはその下に綿毛をもつものもある。斑点のあるものが多く，はっきりした模様をもつものもある。

よく陸の動物に比較され，《海のゾウ》《海の子ウシ》《海のヒョウ》などと呼ばれた。中世にはアザラシが不思議な効能をもつとされて，からだの各部分がいろいろな病気の特効薬とされたものである。

感覚器官は，どれもよく発達している。鼻と耳の穴は，自由に開いたり閉じたりすることができる。閉じるとたんなる細い割れめのように見える。水中でなくても，鼻の穴はふだんは閉じていて，息を吸うたびに開く。

目は大きくて，虹彩（こうさい）が上下のまぶたにかかるほど大きいので，白目の部分はめったに見られないほどである。

視覚がおそらくもっとも鋭敏な感覚だろうが，次に発達しているのは，たぶん聴覚だろう。もっとも耳の穴はずいぶん小さいけれども。嗅覚（きゅうかく）もかなり鋭く，しばしば危険が迫るのをにおいで知るといわれる。えさをえり好みするところをみると，味覚も繊細であるに違いない。触覚もよく発達していて，軽く触れただけで異物に気づく。

鰭脚類のうちでは，もっとも広範囲に分布している。北極海，南極海，太平洋，大西洋，地中海のほか，川で海につながっている内陸の鹹水沼湖や，カスピ海やバイカル湖のような，かつて大洋の一部だったところにも，数多く生息している。とはいえ，好んですむのは極寒の地方，とくに北極圏内である。人けのない海岸で暮らし，あまり沖合いには出ないようにしている。

《呼吸孔》の効用

アザラシは地面を歩くことができないので，からだを引きずってはって進むが，たいへん苦しそうにみえる。しかし，いざとなると速く，敏捷な人間でも，逃げるアザラシを捕えるには苦労する。

水中では，実に楽々と動きまわる。非常なスピードで泳いだり，あるいは何時間も水面に浮かんでいたりする。浮かんでいるときには，からだをじっと動かさず，眠りこんでいることさえあり，頭部と背中の一部分だけが水面上に現われている。

かなり深いところまでもぐり，水深100メートル近いところで，つり針やはえなわにかかることがある。陸上では5～8秒おきに呼吸しているが，水中では15～25秒おきに水面に浮きあがって呼吸する。敵に追われているときなどは，10数分も水にもぐったままでいることがある。

海中に数日間，あるいは数週間もつかったままでいるが，これはすべての必要を水中で満たすことができるからである。それでも陸に上がってくるのは，じゅうぶんに休息をとり，からだをあたためるためである。

海岸に寝そべっているアザラシは，無気力の象徴のようにみえる。ときどき寝返りをうって腹部を日光にさらし，疲れきったように薄目をあけ，またすぐに眠りに落ちる。鳥などがまわりで騒いでも，興味を示さない。このように群れが陸上で眠っているときでも，数頭の雄が寝ないで見張りをしている。

極寒の地方にすむアザラシは，岩の上より

[illegible] *Halichoerus grypus*
[illegible]の沿岸にすむ
[illegible]ているのが特徴
雄は体長3.0メ[illegible]，体重290キロほど
[illegible]
[illegible]



も氷の上にいることが多い。氷の上でもアザラシは、じっと何時間も動かずに眠っている。厚い皮下脂肪の層が寒さを絶縁するので、氷の上でも苦痛を感じることなく、とどまっていられるのである。しかしかれらは、温度に対して無感覚なのではない。むしろ反対に、日光浴が好きなことからもわかるように、暖かいことを非常に喜ぶのである。

きびしい冬がやってくると、極寒の海はすっかり氷におおわれてしまう。アザラシたちは氷の上で日光浴をするが、えさを捜したり、あらしが吹くときには、海にもぐる〔注3〕。そこで氷が張りだすころに、《呼吸孔》と呼ばれる穴を氷の表面にあけ、穴がふさがらないように気をつけていて、ここから出入りする。

アザラシの鳴き声は、しわがれたほえ声のようなこともあり、押し殺したうなり声のようなこともある。おこるとイヌのようにうなり、興奮すると騒々しくわめきたてる。

アザラシは自分の子をかわいがり、よくいっしょに遊んでやる。危険が近づくと、親は子どもを前肢（ぜんし）でしっかりと胸に抱き、急いで海にとびこむ。子連れのアザラシは、先に子どものほうを捕えると、親はそばを離れないので、結局両方ともとれるという。

飼いならしやすい動物で、飼い主が呼べば返事をし、その手からえさをもらって食べる。えさは魚類、イカ、タコ、カニなどで、他の動物に対しては無関心だが、イヌに対しては著しい敵意を示す。

アザラシは、傷を受けても回復が早い。シャチは恐ろしい敵で、追われると岩のあいだ

[illegible] *Hydrurga leptonyx*
南極海全域にすみ、あまり群集を[illegible]かない。
[illegible]きく、深く裂けていて、魚、[illegible]
他のアザラシの子どもを襲って食べる。上
PHT. FRIZE

[illegible] *Lobodon carcinophagus*
[illegible]にして、主食は[illegible]類。
南極大陸周辺にすみ、遠くまで回遊する。
地球上でもっとも数の多いアザラシである。下
PHT. FRIZE





や浅瀬や，陸上に避難する。ホッキョクグマに襲われることもあるし，サメのような肉食性の魚類にもねらわれている。子どもたちにとっては，オオワシのような大型の鳥類も，危険な存在である。

婦人のコートになる毛皮

交尾期は，ふつう春だが，種によっても分布地域によっても異なる。8～12か月の妊娠（にんしん）期間を経て，雌は1子を生む。きわめてまれに，2子が生まれることもある。分娩（ぶんべん）の場所は，小さな無人島の浜べや，岩礁の上，あるいは流氷の上などである。

アザラシの子は，じゅうぶんに発育して生まれてくる。からだはふつう，厚くて柔らかな，白いうぶ毛でおおわれている。このままでは，とても水中生活などはできそうにもないが，やがてもっとあらい，新しい毛にはえかわる。母親は子どもの毛が抜けかわらないうちは，いっしょに陸上または流氷上にいるが，えさを食べに何度も海にはいる。

成長は非常に早く，生まれて数週間もすると換毛し，同時にひとりで行動できる少年期にはいる。しかしより寒い地方では，独立するまでにさらに時間がかかるので，親はゆっくり子どもを養育することができる。

アザラシは寒い地方の人びとにとっては，重要な生活の糧となっている。また極地探検家がそりを引かせるイヌのえさにしたり，ビタミン類の不足しやすいむかしの探検隊では，アザラシの生肉を食べることが，健康を保つための秘訣だったという。

漁業者たちにとっては，アザラシは害獣である。網のふちで紡錘形のからだをころがして中にはいり，さんざん魚を食い荒らしてから，またからだをころがして出ていく。

ヨーロッパやアメリカ合衆国では，アザラシの毛皮が高く評価されていて，婦人のコートなどをつくるのに使われる。だいたい4頭分の皮から1着のコートができる。またアザラシの毛皮は寒さに強いので，スキーの裏に張るいわゆるシールとして使われたり，戦時中には代用品の靴にまで使われたが，これは裂けやすいので評判はよくなかった。

このようにアザラシは，害獣でもあり，毛皮や脂肪が利用できるので，むかしから大規模な狩りが行なわれてきた。

間宮林蔵は，サハリン測量の際に見聞した，オロッコ族のアザラシ狩りについて記録を残している。それによると，丸太でイカダをつくって海岸に浮かべておき，これに上がって眠りこけているアザラシを，もりで突くのだという。

現在では鉄砲を使うが，泳いでいるのを即死させると沈んでしまうので，流氷や岩の上にいるものをねらうか，あるいは小さい弾を使い，即死せずにもがいているのをすくいあげる。日本では北海道でアザラシ狩りが行なわれ，これを職業とする人もあり，毎年3000頭が捕獲されている。

アザラシ科13属19種のうち，ゾウアザラシ属，ズキンアザラシ属，モンクアザラシ属，タテゴトアザラシ属，ゴマフアザラシ属について述べよう。



ウェッデルアザラシ。
生息地の南限は南緯80度付近で
哺乳動物のうちもっとも南にすむ種類である。
海岸からかなり内陸までいくこともある。（上）
PH. EXPEDIT. POLAIRES FRANÇAISES

キタゾウアザラシ。
妊娠期間は11か月に及び
出産直後に陸上で交尾する。
子宮が左右に1つずつあるので
産後の回復を待つ必要がない。（下）
PH. S. GILLSATER

ミナミゾウアザラシ。
アザラシ科では最大の動物で
雄は体長6.5メートル，体重3トンに達し
雌でも体長3.5メートルほどになる。（右）
PH. F. ERIZE











ゾウアザラシ属 *Mirounga*

ゾウアザラシは、アザラシ科のなかで、もっとも大きな動物である。雄では体長6.5メートル、体重3トンに達するものがある。雌でも、体長3.5メートルになる。

頭部が大きく、やや長めである。広い鼻うらが顔のまん中にある。上くちびるには、長さ15センチぐらいの、褐色(かっしょく)の触毛がはえているが、これはネコのひげに当たるものである。目は比較的大きくて、ややとびでている。まゆ毛はかたい毛で、10数本ずつある。耳は、目の後ろの、目より低い位置についているが、穴があいているだけで、耳介(じかい)はすっかり退化している。

鼻は、成熟した雄では非常に変わった形をしている。長さ40センチほどもあり、興奮するとさらに太く長くなって、倍の大きさになる。ふだんはこの鼻はたれ下がって、鼻孔は下を向いている。

首は太くて短く、胴体との境がはっきりしない。全体にたくましく、ずんぐりした感じである。背骨がきわめてしなやかなので、そり返ると頭部が地面に届くほどである。

前肢(ぜんし)は長くないが、力は強くがんじょうである。5本の指は水かきでつながっていて、ひれになっている。後肢は比較的長く、やはり5本の指があり、ちょうど2本のオールのような形をしている。尾はきわめて短く、先がとがっている。

全身にはえている毛は、かたくて短い。毛色は茶褐色だが、青灰色から灰白色の部分がまばらにあり、年とともに位置が変わる。これは茶褐色の毛のはえ方に、多い時期と少ない時期があるためである。

ゾウアザラシ属には、分布地域によって2種がある。**ミナミゾウアザラシ** *Mirounga leonina*は、南極海、南大西洋、南太平洋にすんでいる。夏は小さな島で繁殖し、換毛する。冬は海にもどり、回游(かいゆう)をするらしいが、そのコースはわかっていない。

キタゾウアザラシ *Mirounga angustirostris*は、北太平洋東側の暖かい海域にだけ、生息している。生息海域はミナミゾウアザラシの生息海域と遠く離れているが、形態や習性は非常によく似ている。

ゾウアザラシの好きな場所は、砂浜か砂利(じゃり)浜である。陸上を動きまわるのは苦手(にがて)で、すぐに疲れてしまう。移動する方法は、他のアザラシと同じである。つまり、からだを弓なりに曲げて、次に思いきりのばす、という動作を繰り返すわけだが、からだが重いので、移動したあとには深いみぞが残る。

水中では、その巨体に似合わず、見違えるほどの器用さである。泳ぎに、潜水に、あらゆる形の運動をこなし、波に揺られて静かに眠っているかと思えば、獲物(えもの)を追ってフルスピードで突進する。えさはおもに魚類と頭足類(イカ、タコの類)だが、海藻(かいそう)類を食べるようなこともある。

ゾウアザラシの感覚は、あまり発達していない。目は近距離のものしか見えないようだ

カニクイアザラシ
流氷にのって移動しながら休息をとっている
からだのあちこちに大きな傷跡があるのは
歴戦の勇士のしるしだろうか。(37-10, 11)
PH. F. ERIZE

タテゴトアザラシの母と子
生まれたばかりの子どもは、全身がまっ白で
厚い、柔らかいうぶ毛におおわれている。
この毛皮は珍重され、狩人にねらわれる。(左)
PH. F. BEL, G. VIENNE, J. P. VARIN JACANA

ミナミゾウアザラシの子ども
アザラシは繁殖期には群れをなして上陸するが
子どもたちが独立して生活できるようになると
海にもどり、回游に出かける。(上)
PH. ROUILLON IMAGES ET TEXTES





し、耳もあまりよくない。巨体を包む厚い脂肪層のためか、触覚も鈍くなっている。知能もかなり低いように思われる。

性格は温和で、平和を好む動物である。ひどい挑発（ちょうはつ）を受けないかぎり、自分から攻撃（こうげき）に出るようなことはしない。しかし繁殖期に、雌が雌を奪（うば）いあう場合は別である。

脂肪目あての乱獲

繁殖期は、ミナミゾウアザラシでは8月下旬から10月上旬にかけて、キタゾウアザラシでは12月から3月にかけてである。妊娠（にんしん）期間は11か月に及び、出産するとすぐに交尾をする。

雌たちは、繁殖地に上陸すると、20頭ぐらいずつのグループをつくる。1週間ほどすると、1子が生まれる。子どもはよく発育していて、短い黒い毛におおわれて生まれてくる。体長は1.2メートルほど、体重は40～50キロである。生後15日たつと最初の換毛があり、毛色は明るい灰色になる。3、4か月たつと泳げるようになるが、雄の特徴ある鼻は、3歳ぐらいになって性的に成熟しないと発達しない。授乳期間は短く、5週間くらいだが、乳はたんぱく質と脂肪分に富んでいる。寿命（じゅみょう）は30年ほどである。

雄たちが繁殖地にやってくるのは、雌たちよりあとのこともあり、前のこともある。雌たちは次々に繁殖地にやってきて、次々に出産する。出産を終えた雌をめぐって、雄どうしの対決が始まる。一方が降参するまで戦いが続けられるが，両者の力が同じくらいだと、戦いはしだいに血なまぐさいものになる。たがいに首を振って、相手の鼻や首にかみつこうとする。

負けた雄たちは、雌を獲得することができず、ハーレムをつくる権利を失って、すみのほうに追いやられ、失地回復の時をねらっている。どこかのハーレムの雄の力が衰えたり、あるいは監視を怠っている雄があると、雌を奪（うば）ったり、ハーレムの首領の地位を奪ったりするのである。

アザラシ科動物のほとんどの種類は水中で交尾するが、ゾウアザラシは陸上でも交尾する。雄は、続けて何頭もの雌を相手にする。繁殖期が終わるまで、雄は何も食べない。隣のハーレムとの間には境界は何もないし、あぶれた雄がいつも雌を横取りしようとしているので、つねにハーレムを監視しなければならない。

ハーレムがつくられたあとで、処女の雌が繁殖地に到着する。多くはハーレムにははいらず、独身の雄とつがいをつくる。

繁殖期が終わると、ハーレムはくずれ、ゾウアザラシたちは海に帰る。この季節は海にはえさが豊富にある。2か月余りを海のなかで過ごし、また岸べに上がって換毛する。こんどは雌雄が別に群れをつくる。

属名のMiroungaは「驚くほど油がある」という意味。古くから脂肪目あての人間により大量に捕獲された。（上）
PH. F. ERIZE

わが輩によく似た人間がいるというが、わが輩の関知するところではない。円い大きなひとみが、なかなか魅力的であろうが！（下）
PH. [illegible]

興奮すると鼻がこのように大きくふくらみ、長さも太さも2倍ほどになる。これで相手をおどし、ほえ声を響かせる。（右上）
PH. B. TOLLU-JACANA





換毛のときには、古くなった表皮が、ぼろきれのようにはげ落ちる。かゆいのか、ゾウアザラシたちは古い皮を早く落としてしまおうと、地面をころげまわる。それがすむと、新しい毛がはえてくる。アザラシたちは海に帰り、次の繁殖期までを海で過ごす。

むかし、ゾウアザラシたちは、人里離れた島でなんの危険も感じないで生活していた。航海術が発達してからは、人間は見つけしだいアザラシを捕獲して、毛皮や脂肪を利用するようになった。ゾウアザラシの学名のうち、属名の*Mirounga*は、ラテン語で「驚くほど油がある」という意味である。雄なら体長6メートルを越える巨体に、厚さ10センチの脂肪層があるのだから、狩猟者にとっては捕えがいのある獲物といえるだろう。

なおミナミゾウアザラシの種名*leonina*は、「ライオンのような」という意味で、ほえる姿からの連想でつけられたものだろう。キタゾウアザラシの種名*angustirostris*は「狭い鼻」を意味する。

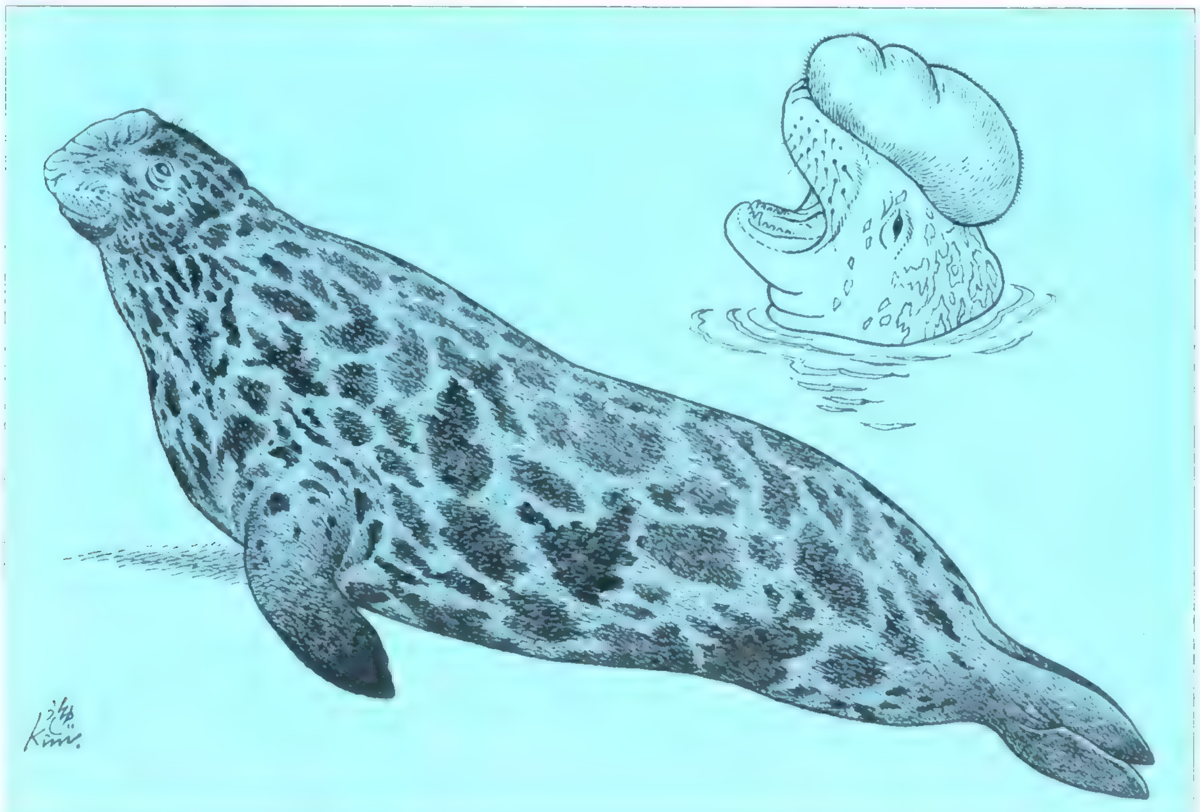
ゾウアザラシの新鮮な脂肪が、すぐれた強精剤になるという伝説があり、これはハーレムの観察からの類推によるものだろうが、科学的な根拠はない。皮は厚くてかたいので、鞄や馬具をつくるのに使われていた。

現在の生息数は、ミナミゾウアザラシが40万から60万頭、キタゾウアザラシが1万頭ほどである。



雄どうしが激しく戦っている……のではない
子どもが親からほえかたを習っているところ
どうやら、こんなものでいいかな
PHIL FRIZE





ズキンアザラシ属 *Cystophora*

ズキンアザラシ

Cystophora cristata

ズキンアザラシ属には，ズキンアザラシ1種しかいない。ズキンアザラシの特徴は，その名のとおりに，頭巾のような形になる雄の鼻である。4歳ぐらいの性的成熟期にはいると，この特徴があらわれてくる。鼻の穴には膨張させることができる，濃い赤い色の1対の袋があり，空気を入れてふくらませると，長さ15センチにもなる。これが頭の上に頭巾をかぶったような形に出てくるのである。

からだの大きさは，雄では体長3.5メートルに達することもあるが，雌では2.0メートル以上にはならない。

からだつきは紡錘形で，頭部は大きく，鼻づらの先端は丸みを帯びている。うめはがんじょうにできている。尾は幅が広いが，短い。毛並みは二重になっていて，かなり長い粗毛が，羊毛状の密生した綿毛をおおっている。ふつう背は薄い褐色だが，ときにはもっと暗い色の斑点がついていることもあり，腹は錆色または灰色の1色である。

分布地域は，北極海と北大西洋，とくにアメリカ北東岸やグリーンランドの沿岸，その付近の諸島である。非常に寒いところなので，陸地だけでなく大きな流氷の上にいるのを，よく見かける。

9月から3月にかけて，デービス海峡やバフィン湾〔ともにカナダとグリーンランドとの間にある〕に，ズキンアザラシがたくさん集まってくる。それは，この海域にえさとなる魚類やイカ，タコなどが，たくさんいるからである。

4，5月には，グリーンランドに姿を現わし，ここに6月の末か7月はじめまでとどまる。換毛したり，出産と交尾を行ない，子どもが泳げるようになると，北方をめざして回游に出かける。

妊娠（にんしん）期間は，ほぼ1年に及ぶ。生まれたばかりの子どもは，体重が11キロほどである。ゾウアザラシの子と違って，うぶ毛に包まれてはいない。というのは，出産前に最初の換毛を終えているからである。胎生中に行なわれた換毛の古い毛皮は，分娩（ぶんべん）のとき，あと産〔胎児を包んでいた膜と胎盤〕といっしょに出てくる。子どもが満1歳になるまでつけている白い毛皮は，非常に美しいので，狩猟者たちにねらわれる。

モンクアザラシの母と子。
大きな回游はせず，一定の海域にいて
群れをつくらず，家族か単独で生活する。
生息数が少なく，アメリカでは保護動物。（上）
PH. M. ROBERT-JACANA

ズキンアザラシの雄。
興奮すると鼻袋がふくらみ，図のように頭の上に
頭巾をかぶったようになる。体長3.5メートル
体重400キロほど。北大西洋にすんでいる。（下）
イラスト：木村しゅうじ

ズキンアザラシは、かなりおこりっぽい性格のようである。攻撃されると、いつでも力の限り戦う

繁殖期には、雄どうしが雌を奪いあう。鼻袋をふくらませ、息を切らして、相手にかみつこうとする。しかしハーレムらしいものはつくらない

現在の生息数は40万頭と推定されているが、毎年3000頭が捕獲されている

モンクアザラシ属 *Monachus*

モンクアザラシは、温熱帯の海に生息する唯一のアザラシである

モンクアザラシ属には、分布地域により3種がある。**チチュウカイモンクアザラシ***Monachus monachus*は、地中海、黒海、アドリア海、それに大西洋の西アフリカ沿岸に分布している。**タイヘイヨウモンクアザラシ***Monachus schauinslandi* は、ハワイ諸島にいる。**タイセイヨウモンクアザラシ***Monachus tropicalis*は、メキシコ湾とカリブ海に生息していたが、現在は絶滅したとみられている

この3種は、形態のうえでは非常によく似ているが、分布海域はそれぞれ遠く離れている。なぜそうなったかについて、ある学者は潮流や風によって運ばれたといい、また古くは今よりはるかに広い海域にすんでいたのが、ごく一部だけ生き残ったと考えている学者もある

体長は雄で3メートルほど、雌はもう少し小さい。体重は225～275キロである。からだつきはずんぐりしている。頭は丸く、坊主頭のように見えるので、モンクアザラシの名がついた〔学名の*Monachus*はラテン語で修道僧を意味する〕。目はまるく、やや突きでている

体毛はあらくて短く、綿毛はない。毛色は、灰褐色でむらがなく、腹では黄色みを帯びてやや薄い色になっている

モンクアザラシの好んですむ場所は、岩の多い小さな島や、崖の切りたった海岸、とくに満潮時には海水が流れこむような、海岸の洞穴である。えさは魚類、貝類、イカ、タコなどである

このアザラシは、生息数がひどく減ってしまったので、大きな群れはつくらず、小さな家族集団か単独で生活している。回游はせず、ずっと同じ場所で生活している。臆病な動物で、くわしい習性はよくわかっていない

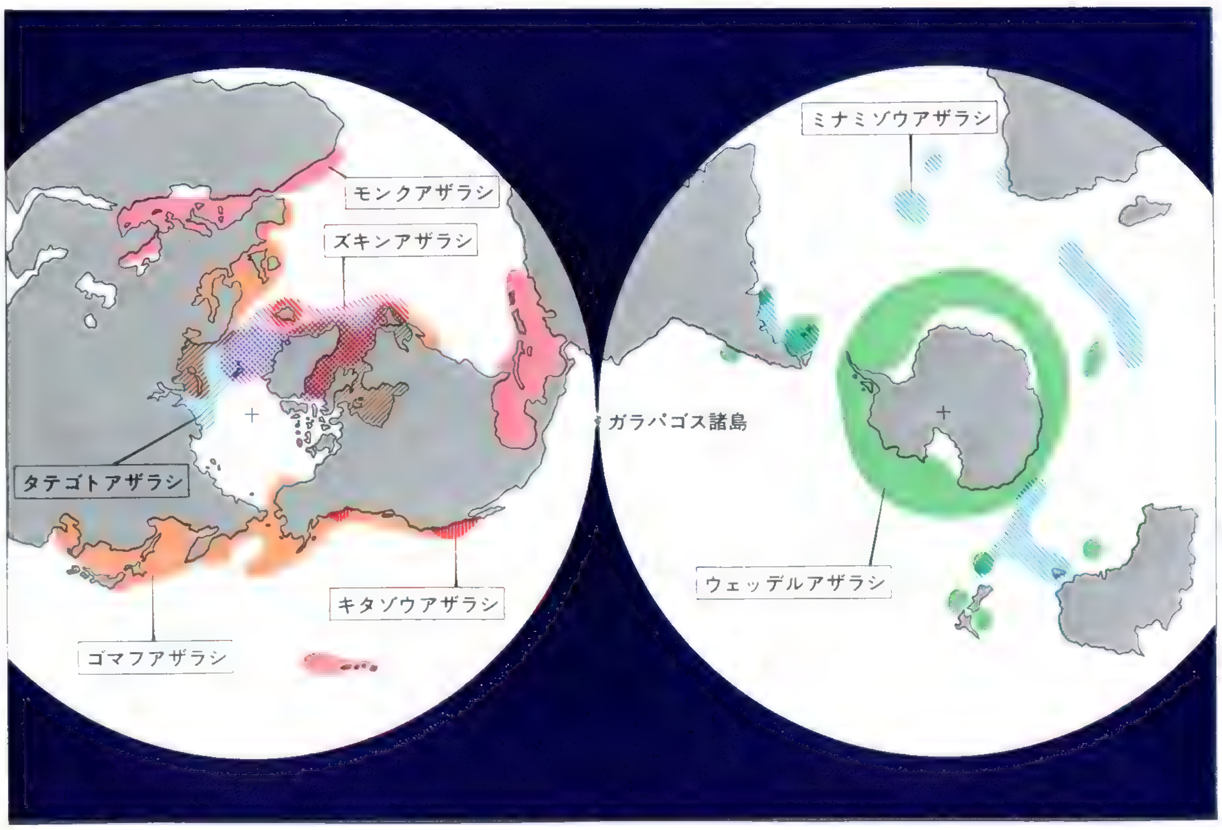
妊娠（にんしん）期間は11か月で、8月から9月の間に、人の近づけない海岸とか、洞穴の入り口などで出産する。生まれたばかりの子どもは、黒い毛におおわれている。授乳期間は3、4週間で、6週間たつと独立生活にはいる。繁殖期には、一夫一婦制に近い生活をしている

鳴き声は、イヌのほえ声に似ている。ハーハーと、せわしい息づかいをすることもあり、くしゃみのような音を出すこともある

20世紀のはじめから、アメリカ合衆国では法律で、ハワイのタイヘイヨウモンクアザラシを保護している。現在の生息数は、モンクアザラシ属の3種を合わせても、わずか2000頭から7000頭といわれ、他のアザラシとくらべて非常に少ない



チチュウカイモンクアザラシ
頭がきわめて丸く、細い毛が密生しているのが
坊主頭のように見えるので
モンク（修道僧）アザラシの名がある。（上）
PH. AARONS



アザラシ科の分布。アザラシ科は13属19種あり
亜種も多いが、おもなものを示した
一般に冷たい海に分布しているが
モンクアザラシだけは、温熱帯の海にいる



タテゴトアザラシ属

Pagophilus

タテゴトアザラシ

Pagophilus groenlandicus

タテゴトアザラシ属には、タテゴトアザラシ1種しかいない。タテゴトアザラシは、体長1.8メートルほど、体重は180キロ程度である。体毛は密生していて、短く、つやがある。毛色は灰色がかった鹿毛色だが、ときにはクリーム色のこともある。頭の前面と背中の模様は、チョコレート色または黒褐色になっている。この模様は竪琴、あるいは蹄鉄のような形をしているので、タテゴトアザラシの名がついた。雌は雄よりも毛の色が薄く、背中の模様もはっきりしない。

分布域は、北極海と北大西洋に限られる。カナダ北部、グリーンランド、北ヨーロッパの沿岸で見られる。しかし海岸にいるよりは流氷群のなかで暮らすのが好きで、氷の上に寝そべったり、下にもぐりこんでえさを捜したりしている。

海面に氷が張りつめると、海に出入りするための呼吸孔をつくるが、ホッキョクグマや猟師はこの習性を知っていて、この穴のふちで待ち伏せたり、穴をふさいでから氷上を追いかけたりする。

妊娠（にんしん）期間は11か月である。春のはじめに、雌たちは出産の場所を捜すが、





それは生まれたばかりのまだ泳げない子どもが危険な目にあわないような，氷が厚く張っているところでなくてはならない。

氷上で出産をすませると，雌は自分の選んだ雄のところにもどり，交尾する。雄は交尾がすむと，さっさと相手を置きざりにして，育児の手助けはしない。

タテゴトアザラシは，1産1子である。猟師たちのなかには，2，3頭の子どもを連れた雌を見たという者もあるが，これはおそらく，親をなくした子どものめんどうをみていたのであろう。

生まれたばかりの子どもは，密生した白い毛におおわれている。この毛は氷の上ではまったく目だたないので，敵から身を守る保護色になっている。母親は子どもに深い愛情を傾け，子どもを守るためには敢然と猟師に立ち向かいさえする。数日たつと，子どもはあらいまだら模様の毛に換毛する。すると母親は子どもを水にはいらせて，泳ぎと魚とりを教える。夏の間にもう一度換毛し，成獣と同じ模様があらわれてくる。

アザラシ科の動物は一般に，陸上を歩くのは苦手だが，タテゴトアザラシは前肢（ぜんし）をうまく使って歩くことができる。

水中ではすばらしいスピードで泳ぐが，何度も跳びはねながら前進し，跳びはねると全身が水面上に出る。巨大なウミヘビを見たということが，毎年ある時期になるときまって報告されるのは，おそらく回游中のタテゴトアザラシの群れを見たものだろう。何頭かのタテゴトアザラシが，1列に並んで跳びながら泳いでいるのを見た人が，長いウミヘビが波を切って進んでいると信じこむのも，ありうる話である。

えさはおもに魚類だが，大型のプランクトン性甲殻（こうかく）類も食べる。現在の生息数は，2万頭から5万頭とみられている。

タテゴトアザラシ
背に黒い，竪琴の形の模様があるのは雄で
雌は色も薄く，模様もはっきりしない
体長1.8メートル前後，体重180キロほど。(左2枚)
PH. F. BEL, G. VIENNE, J. P. VARIN, JACANA

タテゴトアザラシ
氷が張り始めるころに穴をあけておき
呼吸のためにときどき海面に顔を出すほかは
ずっと海中で生活している。(上)
PH. F. BEL, G. VIENNE, J. P. VARIN, JACANA



タテゴトアザラシの子ども。
アザラシの子どもは，生まれたばかりのときは
一般に純白の毛皮をつけている。
氷の上では巧みなカムフラージュになる。(下)
PH. F. BEL, G. VIENNE, J. P. VARIN, JACANA





ゴマフアザラシ属　*Phoca*

ゴマフアザラシ　*Phoca vitulina*

ゴマフアザラシ属には、ゴマフアザラシとゼニガタアザラシの2種が含まれる。

ゴマフアザラシは、体長1.8メートルほど、体重は雄で150キロ、雌で120キロほどである。毛並みは薄い灰色で、暗い灰色の斑紋が、ゴマのちらばったように見えるので、ゴマフアザラシという。

北太平洋、ヨーロッパ北部、アメリカ大陸北部の沿岸に広く分布していて、生息地域により亜種が多い。日本付近では北海道周辺に多く見られ、まれに紀伊半島や山陰の海まで迷いこむことがある。

カナダのシール湖は、海抜240メートルの高さにあり、ここにはずっとむかしからゴマフアザラシの群れが生活している。海からは完全に切り離されているが、さほど苦にならないらしく、たいへん繁栄している。またアラスカの淡水湖にもゴマフアザラシがすんでいるが、ここは川でベーリング海につながっているので、アザラシは自由に海へ出ることができる。

群れをつくって生活しているが、他のアザラシほどの大群をつくることはない。雌は3歳で、雄は4歳で成熟する。水中で交尾するが、その時期は地方によって異なる。子どもは白いうぶ毛をつけて生まれる。

えさは魚類、貝類、甲殻（こうかく）類〔エビ、カニ、オキアミの類〕、頭足類〔イカ、タコの類〕である。

天敵は、ホッキョクグマとシャチである。人間は、このアザラシが群集性が少なく、ばらばらに分布しているので、他のアザラシほど多くは捕獲しない。若いうちに捕えて飼うと、飼育生活によく慣れ、飼い主になつくほどになる。

北海道では、ゴマフアザラシとワモンアザラシ *Pusa hispida* もトッカリと呼び、脂肪や皮を利用している。

[illegible]
背の[illegible]が、[illegible]をまぶしたように[illegible]える
[illegible]までは北海道周辺に多く[illegible]布する
体長1.8[illegible]、体重150キロほど[illegible]
PH. [illegible]

[illegible]
[illegible]、飼育生活によく慣れる
[illegible]や[illegible]館で、もっとも[illegible]見られる
[illegible]である。[illegible]
PH. B. PIERNO

アザラシの研究１

アザラシの分類について

西脇昌治

動物分類学を研究している学者のなかで、鰭脚（ききゃく）類を食肉目の亜目とする学説と、独立の目とする学説との２つの考え方がある。

動物の分類は、ふつうその形態や分布などとともに、先祖がどのような動物であり、どの種類と近縁であるかを考え、系統的に分類する。そのなかでも目の分類は、分化の起源の地質年代によることが多い。

鰭脚類の場合、形質は確かに陸上の食肉目とは異なった適応変化をしているけれども、かなりよく似た部分もあり、その先祖型と思われる動物が生息していた地質年代は、かなり新しい。すなわち中新世（2800万年前～1200万年前）にはじめて現われている。この時代には、ゾウの耳は小さいが、鼻は長くなりつつあり、ウマは小型だが現生のものに近い形になり、クジラも現生のものとほとんど変わらない形になっていた。そんなことから、従来は鰭脚類を食肉目の亜目としている学者が多かったのである。

一方、これだけ形質が分化しているということは、近い年代になされたものではなく、かなり古くから分化発達したものと考えることもできる。鰭脚類は海で生活する動物であるから、海にはいった時代がかなり古くても、初期のものが化石として出現するにはいたらず、海底にうずもれているのかもしれない。クジラの場合でも、古い化石と新しい化石はかなり知られているが、中間の年代のものは少ない。

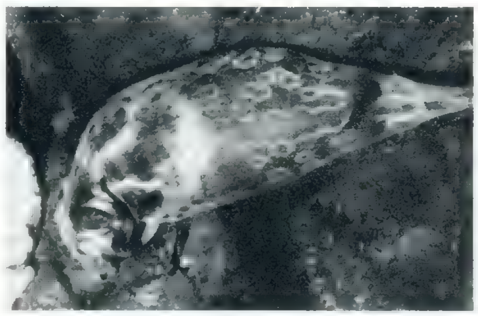
そこで、化石年代が新しいということだけで亜目とするのは適当でなく、独立した目を立てるべきだとする学者が、かなり多くなってきた。とくに鰭脚類を専門に研究している学者には、習性と形態が陸上の食肉目と大きく異なることを強調し、独立の目としたいという人が多い。

鰭脚亜目のうち、アシカ科とセイウチ科の動物は、後肢（こうし）の足首から先を、からだの前方に曲げて、陸上を歩くことができる。これをまとめてアシカ上科と呼び、これに対して、陸上で歩くことができないものをアザラシ上科と呼ぶことが多い。アザラシ上科にはアザラシ科だけが含まれ、３つの亜科に分類される。このような方式によるアザラシの分類は、左の表のとおりである。









写真上から順に、クラカケアザラシ、アゴヒゲアザラシ、アゴヒゲアザラシの子ども、ワモンアザラシ
撮影　内藤靖彦（東京大学海洋研究所）

アザラシ科の分類

亜科	族	属	種
ゴマフアザラシ亜科	ゴマフアザラシ族	ゴマフアザラシ属	２種５亜種
		ワモンアザラシ属	３種５亜種
		クラカケアザラシ属	１種
		タテゴトアザラシ属	１種
		ハイイロアザラシ属	１種
	アゴヒゲアザラシ族	アゴヒゲアザラシ属	１種
モンクアザラシ亜科	モンクアザラシ族	モンクアザラシ属	３種
	ナンキョクアザラシ族	カニクイアザラシ属	１種
		ロスアザラシ属	１種
		ヒョウアザラシ属	１種
		ウェッデルアザラシ属	１種
ズキンアザラシ亜科		ズキンアザラシ属	１種
		ゾウアザラシ属	２種

本文記事では、おもにヨーロッパを中心としてみた種類が多く取り扱われており、それに極海のものを多少加えた程度と思われる。そのため鰭脚類全般の説明としては、北太平洋産のものと南極海に分布する種類、とくにこの地域のアザラシについての説明が不足しているので、説明を加えておきたい。

日本近海のアザラシ

日本の周辺で見られるアザラシのうち、本文記事に説明のないものに、ワモ

――→＊

――――カラーページ注――――

〔注１〕　**乳酸の蓄積**　運動に必要なエネルギーのもととなるグリコーゲンは、食物から吸収されてブドウ糖となり、消費された後には、炭酸ガスと水になって体外に排出される。この過程では酸素が必要だが、その酸素が供給されないと、グリコーゲンは乳酸の形で体内に蓄積され、分解されないでいる。

アザラシ類の体内で、潜水中に血液の供給が少ない器官では、酸素が不足するので、乳酸の蓄積量が多くなる。海面に浮上して呼吸することによって、酸素が供給されると、乳酸は分解して新陳代謝は再開される。

乳酸が体内に蓄積されることは、潜水に必要な条件ではないが、潜水の動作によって自律神経が働き、身体内ですぐ必要でない器官に血液の供給が少なくなり、一時新陳代謝が停止するために起こる現象である。

〔注２〕　**鰭脚類の臼歯**　鰭脚類の臼歯は、いくつかの歯冠尖頭をもった型で、臼（うす）の形をしていない。他の動物の臼歯の場合には、歯をすりあわせて食物をくだき、その間に唾液を混入して胃袋に送るが、鰭脚類の臼歯は、食物を引き裂いたり、食物である生きた動物が逃げないようにつかまえ、飲みこむ作業を手伝うのにつごうのよい形になっている。

そこで臼歯と呼ぶかわりに頬歯（きょうし）(Cheek Teeth）と呼び、また前臼歯と臼歯の区別は前頬歯、頬歯などと呼んだり、区別せず両方を頬歯と呼ぶ場合がある。近年では、鰭脚類を研究している学者は、頬歯ということばを使う場合のほうが多い。しかし歯の起源からいって、臼歯とするのも誤りではない。

〔注３〕　**海水の温度**　極地の空気はとても冷たく、とくに冬季の気温が零下10度や零下20度のことも決して珍しくはない。それに風が加わると、体感温度はさらに下がる。一方海水が凍る温度は、塩分濃度によって多少かわるが、ふつう零下４度である。つまり海水としては、それ以下の低温になることはない。そのため、冬期は氷上より海中のほうが暖かいことになる。

そこでアザラシは、氷が張り始めると、厚くならないうちに自分の呼吸する穴をあけておく。穴のまわりの氷はしだいに厚くなるが、穴の部分は10～30分に１回アザラシが顔を出し、張ったばかりの薄氷を破る。このようにして、アザラシは氷の下の海水中で冬を過ごす。海水は氷上より暖かいことを、本能的に知っているのである。■　（西脇昌治）

ヒグマと2人のイノシシ 35

鎖とゲンコツと

畑　正憲

どんべえを手元に置いてみての第一の誤算は、なかなか鎖に慣れない点であった。10日位さ、とたかをくくっていたが、引っ張られると野性をむきだしにして怒った。時には、命さえ要らぬといった反抗を示した。

さすがにヒグマねえ

と、妻は複雑な感心をした。

仕方がないよ、イヌだって結構大変なのだから

そうねえ。あなたが取材でいない時、グルに引き倒されてすり傷をつくったっけ。……そうよね、一度子を産んで落ち着くまで、こちらのペースでは歩かなかったわよね。

調教に出すと別だけどね

でも、相当しごくのでしょう。横浜の獣医さんに聞いたら、棒でひっぱたくそうだわ。きついきつい訓練をして、それでやっと膝の所にぴったり寄りそって歩くようになるのだって

きびしい調教を受けたイヌは、長生きしないとさえ言われている。いわば無理矢理はめられた行動への鉄の輪が、寿命を縮めるのであろうか。

グルは大型秋田犬のメスである。由緒正しい血統書がついているけれど、人間との生活にすんなり順応していったわけではなかった。外に連れ出すと狂喜し、自分勝手に鎖を引っ張ってぐいぐい歩いた。

妻はもちろん、時にはこの僕でさえ思いのままにならぬことがあった。人と調和した散歩を憶えたのは、初めての発情を迎え、出産を経験した後である。

だが、どんべえと決定的に違うのは、人への反抗の姿勢である。

命令に服従させるため、グルが望む方向と逆へゆこうとする。と、グルは四肢を踏ん張って反抗するが、人へも鎖へもアタックしようとはしなかった。ここらが、群れをつくる動物のよさであり、イヌが人に迎えられるゆえんである。

実際、イヌは素晴らしい動物である。現在、島には、霧多布で拾った雑種の小イヌとアイヌ犬が加わり、もうすぐグルが出産する。秋には、家のまわりはイヌだらけになるだろうが、それぞれ個性があり持味があり、僕を力づけ、はげましてくれる。

友人としての素質は、島で放し飼いにしてから磨きがかかってきた。主人の危難を知っており、僕が持病で苦しむ時には側に寄り添い、失望落胆して浜で肩を落としていると、顔中を舐め、生きてゆく勇気を奮い起こしてくれる。それでいて、日頃はうるさくつきまとうわけではない。こちらが忙しく立ち働く時には、はるか彼方で寝そべっている。まさしく、共に生活する友人である。

僕は本当の老境に達し、娘が巣立っていったら、妻と2人でイヌと暮らしたい。花咲き乱れる原野の中で、老妻と2人、イヌに囲まれて余生を送る……つもりだが、家族に言わせると、たとえ百まで生きたとしても、両足を切断しない限り僕は放浪を続けるという。

ともあれ、イヌは素晴らしい、人間と暮らすようにと自然が贈ってくれた宝である。ちゃんと育てさえすれば、人とでは味わえぬ友情が芽生える。

そのイヌでさえ、人と調和するまでにはかなりの時間がかかるのである。それが、血の温かい動物の命というものである。孤独に耐えて峰を徘徊する山親爺の不屈の魂が、そうやすやすと僕のものと溶け合うわけがない。

興味深いのは、鎖に対するどんべえの反応だった。

僕はかつて尊敬する作家から、



グルをそばにつないでおくと
グルは遊ぼうとして、しきりにかまった
その効あってか、どんべえも少しずつ
グルに近寄るようになった



やがて2頭は、戯れ始めたが
どんべえは負けそうになると
強烈な平手打ちをグルにお見舞いした

カラーページ解説

* ———→

ンアザラシ、クラカケアザラシ、アゴヒゲアザラシ、ゼニガタアザラシの4種がある。

ワモンアザラシ　*Pusa hispida*　体長は140センチ前後、体重90キロほどの小さい種類で、体色の変異が非常に多い。ゴマフアザラシにくらべると、からだの斑紋が大きく、灰褐色の地色に濃色のリング状の斑紋がたくさんある。毛は短いが粗毛が多く、綿毛は少ない。オホーツク海周辺で捕獲される。北極地方の氷上ではもっとも数多く分布しているアザラシで、現在300～400万頭が生息すると考えられている。

クラカケアザラシ　*Histriophoca fasciata*　体長は180センチに達する。雄は暗褐青色または暗い灰青紫色の地に、白色または淡黄色の帯が、頭頂から首のまわり、左右の前肢のまわり、腰のまわりにある。これらの帯に囲まれた背が、ウマにくらを置いたように見えるので、この名がある。雌は全身が濃い茶ねずみ色をしているのがふつうで、腰の部分に薄く帯模様がある場合がある。

ベーリング海西部から、オホーツク海北部にかけてだけ、生息している。アメリカ側には少なく、ベーリング海峡を越えて北極海にはいることはないといわれている。流氷にのってオホーツク海を南下し、日本では毎年200～300頭が捕獲されている。

アゴヒゲアザラシ　*Erignathus barbatus*　体長は、ときに3メートルに達する。体色は一様に茶ねずみ色、またはベージュ色で、腹側は薄い色になっている。斑紋はない。吻は幅広く、他のアザラシより額が突きだしている。アザラシの前肢は、ふつう親指がいちばん長く、だんだんと小さくなって、小指がいちばん短い。しかしアゴヒゲアザラシでは、中指が他の指よりも長くなっている。

口のまわりに、長く太い感覚毛がたくさんはえているので、この名まえがあ

「イヌとネコでは、どちらが賢いのですか」

と訊かれ、返答に窮した憶えがある。今もってわからぬが、一緒に生活してみると、ある程度の違いはわかる。

イヌは客観的な情況判断にすぐれ、ネコのものは部分的であり、イヌにまさる集中力を持っている。たとえば鎖につないでコントロールしようとした場合、もしイヌが反抗を試みるなら、鎖を持っている人を襲う。自由を獲得するにはどうしなければならぬか、短い時間で判断する能力がある。

しかしネコは、自分の首から伸びてゆれている鎖をアタックする。その端をつかまえている人を攻撃するのには、別の要因がいる。

だからといって、イヌの方が賢いとは言えぬ。その行動様式の違いの故に、イヌはイヌであり、ネコはネコであるからである。ネコが生きていくためには、部分への集中力がぜひとも必要であるし、イヌにはその真似は出来ぬ。

どんべえは、どちらかと言えばネコ的だった。

僕はかわいがっていたベコというネコに紐をつけて引っ張ってみたことがあるが、その場合とまったく似ていた。ベコもどんべえも、憎しみをひたすら身近な紐や鎖に集中し、爆発させた。ただ、どんべえの方が迫力があるだけだ。

さあこい、こい、きてくれ。

僕は心の中でいのっていた。どうかきてくれ、オレについてこい。オレについてくるのが、お前の宿命なんだ。

この1年のうち、どんべえに憶えさせたい言葉はいくつかある。「こい」「待て」「おすわり」「ダメ」「痛い」「立て」「離れろ」。その位はマスターさせたい。

他に、予想しない信号も割りこんでくる。部屋にストーブが置いてあるので、「熱い」という信号が出来た。「熱い」と言えば、大抵のものには手出しをしないのである。

高温の物体に対して、クマが平気なのは驚くべきである。無感動，無関心。温度を知覚する神経が分布しているのはごく限られた部分らしい。

たとえばストーブの側で遊んでいて、腹の毛がこげ、きなくさい匂いと共にちりちり縮れても意に介しない。平然としている。

敏感なのは、鼻面と舌である。鼻の頭がストーブの煙突に触れようものなら、手足をバタつかせて後退する。

それはまったくの見ものだった。前進しか知らぬと思っていたクマが、腹を床につけ、手足を目茶苦茶に叩きつけて後退するのである。クマではなく、まるでアシカの赤ん坊であった。

もちろん、舌も敏感である。例によって熱いストーブを舐めた時には、子ネコのように空中にとび上がった。

ネコ舌でもある。熱いミルクを与えた際、口をとがらし、

「フウーッ」

と、手を逆立てて抗議し、その足で部屋を駆け回って怒りを発散させた。それからしばらくは、ミルクを指でさわってからでないと飲もうとはしなかった。

けれどこれは、異質なものにいきなりぶつかったせいでもあるらしい。自然界に熱いものが少ないからだろう。どんべえがそれまで接した温度の高いものといえば、母グマの吐く息や体温，乳首からしたたり落ちるミルク位のものだ。

そう思って、僕は次第にミルクの温度を上げていった。すると、40度近くまで平気で口をつけるようになった。

クマの場合，遺伝的にネコ舌ではなく、慣れによって人の料理位の熱さは我慢出来るものらしい。

熱いミルクにパンを浸して与えると、食器の側に寝そべり、パンを前足の爪に引っかけて持ち上げ、おそるおそる口を近づける。食ったものか食わぬものか、しばし思案しているようすは、人が息を吹きかけて料理をさましている姿に似て、とにかくかわいい。駆け寄ってぶんなぐりたくなる衝動を、僕は必死で押えねばならない。

クマへのごほうびは、頭を撫でる位では不十分である。

「よし、いい子だね」

それでごつんとゲンコツである。その位荒っぽくなければ通用しない。■

る。新生児の毛はスレートグレーで、長く柔らかい。2週間ほどすると，藍ねずみ色の剛毛に変わる。

分布地域によって2亜種があり、アジア、アラスカ側にすむ亜種は、ベーリング海、オホーツク海に分布し、まれに海流にのって、日本の本州太平洋岸にも現われることがある。ヨーロッパ、カナダ側にすむ亜種は、ノルウェーの北端，グリーンランド，アメリカ合衆国ニューヨーク州付近まで南下する。■

夜空の動物たち 4

〝大熊〟と〝小熊〟の悲話

水野良平

星座のなかで、もっとも多くの人びとに親しまれているものは、おそらく大熊座の「北斗七星」でしょう。7つの星のつくる大きな〝ひしゃく〟は、だれにでもすぐ目につきます。といっても、秋も深まってくると、あんまり低くなって、ちょっと見えにくくなりますが、夏のうちは北から少し西よりによく見えますし、冬から春にかけては、夜おそくなると東よりに昇ってくるのがよく目だちます。

星だけを見てもクマの形などは目に浮かんできませんが、小さな星まで探ってみると、小さな星が長円形に並んでいて、頭の形に見えないこともありません。そういえば足も4本あって、それぞれの足の先に2つずつ星が並び、爪を思わせているようです。そうやってたどってみれば、なるほど大きなクマの形です。そして「北斗七星」は、クマの背中のあたりから、腹，尻，尾と続いているのです。

この〝ひしゃく〟の水のはいるところにある2つの星を延長したあたりに、北極星があることは、もう知らない人はないでしょう。北極星を捜そうとするとき、いつもそれをさし示してくれるので、この北斗七星がたいへんたいせつなものであるわけです。

北極星から連なる星をたどってみると、ここにも小さな〝ひしゃく〟形の七つ星が並んでいます。これが小熊座です。これこそ熊の形など想像もできませんが、大きな〝ひしゃく〟のほうを大熊座といったので、小さい〝ひしゃく〟のほうを小熊座といったのでしょう。いわば1対の親子グマです。



〝大熊座〟フラムスチード　天球図譜（恒星社編）より

これらのクマにも、有名なギリシャ神話が伝わっています。大熊のほうは、はじめはカリストという美しい人で、月の女神に仕えていましたが、大神ゼウスの目にとまり、その寵愛を受けるようになりました。

これを知った月の女神は、たいそうねたんで、このカリストを醜いクマにしてしまったのです。カリストは、悲しい思いで森のなかをさまよい歩いていましたが、ある日、自分の息子のアルカスが、りっぱな青年になって森を歩いているのに出会いました。クマのカリストは、わが子かわいさに近づいていきましたが，アルカスのほうでは、まさか自分の母とは知りません。大きな獲物が近づいてきたと、弓に矢をつがえて射止めようとしました。

このようすを天上から見ていた大神ゼウスは、「これはたいへん、アルカスに親殺しをさせてはならん」と、にわかにこの息子のアルカスもクマに変えて、親子2匹のクマを天にほうり上げて星座にしてしまいました。

それでこの親子のクマは，今もいっしょに天にあって、仲良く並んでいるのだといわれています。

また別の神話では、「北斗七星」を3頭のウマが引いている車とみたてています。

「北斗七星」の四角のマスが車で、柄のほうの3つの星を、3頭のウマと見たのでしょう。そういえば、3頭のウマの中央の星（柄の端から2番めの星）には、小さな子星がついています。これがきっと、この馬車の御者なのでしょう。■

（天文学者）



飼育自慢

4

ヘラジカ

熊本動物園

和名は「ヘラジカ」だが，アメリカでは「ムース」，ヨーロッパでは「エルク」と呼ばれている。

アラスカなどアメリカ大陸北部，ヨーロッパ北部，シベリアの森林地帯に生息し，シカの種類では最大のものである。体長2.5メートル，体高1.8メートル，体重600キロにも達する。野生での飼料は広葉樹（ヤナギ，カエデ）を主食としており，9月下旬に発情し，妊娠期間は250日ぐらいでほぼ1産1子である。寿命は20年程度といわれる。

本園飼育中の個体は，カナダのエドモンド市ストーリーランド・バレー動物園で1968年6月に生まれ，翌年4月に来園したものだ。世界的珍獣で，日本ではじめての飼育なので，飼料・気温差・動物舎などわからないことだらけ。各方面から資料を集め，注意深く飼育した。

飼料のヤナギは，4～10月の間は毎日採集し投与できるのだが，冬期は落葉するため，10月中に大量に採集して冷凍室に保存し，新鮮なえさを供給しつづける必要がある。

カナダのエドモンド市は，夏季の温度が18度，しかし，熊本は30度にもなるので，動物舎内にはクーラー，エア・カーテン，スプレー式シャワーなどをそなえなければならず，昼夜にわたり連続使用して室温の上昇を防いでいる。また運動場一面には日おおいをつけ，プールは常時水浴できるようにしてあるなど，飼育のためにはいろいろと苦労が多い。■

（管理課長　馬場利吉）

仲間のひろば

インコのおしゃべり

わが家にはキイチャン，ミイチャンと名づけた，ひとつがいのセキセイインコがいます。上半身が美しい黄色，下半身がなんともいえない美しい緑色をした，ハルクインの手乗りのインコです。

雄のキイチャンは，4年前の9月のある日，ふとしたことから小鳥の病みつきになったわたしが，大阪の百貨店でひなを求め，毎日手の上でえさを与えて，それはそれはたいせつに育てたものです。翌年のある日，突然「キイチャン」と自分の名を呼ぶようになり，それ以来いろいろ教えたところ，今では家族の名まえや，教えないことまでしゃべるようになり，わが家の人気者になっています。

「甲斐滋彦ちゃん」（主人）「芳子ちゃん」（わたし）「隆ちゃん」（長男）「浩ちゃん」（次男）「澄子ちゃん」（長女）「おばあちゃん」（わたしの母）「竹岡」（看護婦さん）。竹岡は竹岡さんと教えたのですが，いいにくいのか呼び捨てにします。ほかには，コロちゃん（飼いイヌ）わんわん。ママありがとう。ママちょっとおいで。キイチャンいらっしゃい。こんにちは。キイチャンどうしよう。アテンションプリーズ，などなど。

また，口笛のまねや，ときには訳のわからないことをしゃべっています。雌のミイチャンは2代めで，成鳥を求めてきたのですが，同じかごにいてもひと言もしゃべりません。でも雄といっしょに1日1回かごから出してやると，いつのまにか手や肩にくるようになりました。■

（西宮市・甲斐芳子・46歳・主婦）

裏表紙説明

ゴマフアザラシ　ひれに変形した四肢をうまく使って，立ち泳ぎをしているところ。体長1.8メートルほどの小型のアザラシである。

アザラシというと，極地探検者の記録にしか出てこないものと思っている人も多いが，このゴマフアザラシは北緯40度から70度のあたりに広く分布していて，北海道北岸ではよく見られる。

古くから北方にすむ人びとにとっては，アザラシ類は重要な生活の糧となっていて，今でもさまざまな呼び名が残っている。アイヌの人びとはトッカリと呼び，オロッコ族では，1歳のものをリクシャ，2歳のものをバーラガタ，3歳のものをカロク，成獣をバオイと呼ぶ。

北海道には，漁業や農業のかたわら，アザラシ猟を職業としているトッカリハンターが，30人ほどいる。■

Ph. Klages-Atlas Photo

ペット相談室〈特集〉　変温動物の越冬(下)　杉浦 宏



前回は，変温動物の冬越しの飼育について，基本的な事柄を述べてみましたが，今回は飼育例の多い，代表的な動物をとりあげてみました。

♣コイ，キンギョ

この類は冬眠はしませんが，やはり冬期間の注意深い管理が必要です。

水温が10度以下になると，ほとんどえさを食べなくなります。しかし，よくなれたコイやキンギョは，池のまわりに人が近づくと，えさをもらえると思って集まってくることがあります。水温の低下にともなって，魚の体温も低くなっており，からだの代謝機能も低下しているので，いくら食べたそうに寄ってきたからといって，夏と同じような調子でえさを与えることはやめましょう。魚たちはえさを消化し，吸収する力が弱っているということを忘れないでください。からだにたくわえられた栄養で，もっとも寒い3か月くらいは，えさをとらなくても生きていくことができるのです。

次に，池には冬囲いをしてやりましょう。北風が直接にあたる池ならば，1メートルほどの衝立をたてて，北風をさえぎってやります。また，池の上にビニールなどを使って，おおいをしてやるのもよいでしょう。雪の多い地方では，池のなかに雪が直接に積もらぬように，くふうしてやってください。

♣カ メ

東京あたりの気候だと，11月ごろになると冬眠を始めます。水槽などで飼っている場合には，冬眠の用意をしてやらなければなりません。水の深さが30センチ以上もある池や大きな水槽ならば，そのままの状態で，カメは水底に沈んで冬を送ります。

小さな入れ物で飼っている場合には，まず大きめの箱を用意してください。50×30×30センチほどの箱に土を入れます。下には枯れ葉やわらなどを敷いてやるとなおよいでしょう。首や手足を引っこめて，じっと動かなくなるようになったら，カメを用意した箱の土の上に置くと，カメは自分で穴を掘ってもぐっていきます。このまま翌年の春まで出てきません。箱は物置とか縁の下，玄関のすみのような，冬の間暖房しないところに置いてください。暖かいところだと，目がさめてノコノコと出てきたりするからです。また，土に含まれた水分が凍りついてしまうようなところだと，凍死したりすることがあります。さらに，昼と夜の温度差が激しいところに置くと，体力の消耗も激しく，よくありません。

熱帯産のカメは，冬眠しませんから注意してください。ただし，アマゾンのミドリガメと呼ばれているカメは，北アメリカの中部から南部，メキシコの北部に分布するキバラガメ，アカミミガメのことなのです。冬がくれば，こうしたカメも冬眠しますから，日本産のイシガメ，クサガメと同じようにして，冬を過ごさせてやりましょう。ただし，あまりやせているカメであれば，保温してえさをじゅうぶんに与え，体力をつけてやらなければいけません。

♣ワ ニ

ことしもたくさんの子ワニが，南アメリカから輸入され，買った人も多いことでしょう。成長すれば，1メートルにもなるメガネカイマンは，南アメリカの熱帯地方にすむ種類なので，日本での冬には，暖かくしてやらないと死んでしまいます。

水槽の水は，熱帯魚用のヒーターとサーモスタットを使って25～30度に保つのですが，ガラス管でできた器具だけに，割れると感電して死ぬばかりか，電気の事故にもつながります。そこで，ガラス管のまわりに，硬質塩化ビニール管を使って補強し，カイマンがあばれても割れないようにしてやりましょう。

または，水槽の上から白熱電球を点燈し水温を25～30度になるようにしてやってください。冬でも，風のない天気のよい日には日のあたるところに水槽を置いて，日光浴をさせてやりましょう。■

（上野動物園水族館飼育係長）

ギャラリー

仔　犬

俵屋宗達筆

紙本水墨
90.3×45センチ
個人蔵



早春の土をおしわけて，わらびがのび上がっている。空気はまだ冷たいが，大地のぬくもりはもう春である。この仔犬は，たぶん，はじめて春を迎えるのだろう。なにやらうごめきはじめている足許の大地の気配が不思議でならない，というような顔つきで，目をまんまるくしてしきりに土のにおいを嗅いでいる。まるまるとふとった体つき。弾力のある仔犬特有の腹。短く可愛らしい足と尻尾。嗅いでいる鼻さきの感じ。思わず微笑をさそわれる一幅である。

さらによく見ると，仔犬を描く墨ひと色の，その墨色の濃淡や調子が，実に微妙な変化を示して，仔犬の体の立体感を表現していることに気づく。輪郭線を引かないで，じかに形をべた塗りにして描く没骨法という手法と，墨をにじませたり凝縮させたりするたらしこみという手法は，宗達がもっとも得意とした描法で，立体感のみならず，光線の変化や心理的な情感まで，かれはこの方法で表現することのできた大画家であった。宗達の動物や植物に対する深い愛情も，この方法のいっそうの効果を高めている。

宗達は江戸初期の人。生没年も伝記も不明な不思議な画家だが，着色と墨の両様の名作を数多く残し，日本を代表する大家のひとりに数えられる。かれの作と伝える犬の絵は少ないが，この図がもっともすぐれた出来栄えを示すものである。■　　　　（水尾比呂志）



第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻37号　昭和46年11月21日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



ゴマフアザラシ　説明 30ページ

雑誌　0633－11／21